



スポこい！

テニス部！ バレー部！ 剣道部！

河里一伸

illustration ©しなのゆら

美少女文庫
FRANCE NO SHIN

プロローグ

三人の幼なじみ

私立日ノ宮学園が三学期を迎えて、一週間ほど経った頃。

放課後、二年生の成島優紀は理事長室のドアの前に立って、大きなため息をついた。

「いきなり呼びだすなんて、伯母さんもなにを考えているんだろう？ 僕が親戚だっ

てことを秘密にしようって言ったの、伯母さんのほうなのに」

校長や担任ですら知らないことだが、日ノ宮学園理事長の水瀬恵子は少年の伯母な

のである。彼女は前理事長だった夫を十五年前に亡くし、三十歳で理事長に就任した。以来、さまざまな改革を進めて、生徒の自主性と自由を重んじながらも規律ある校風という、現在の日ノ宮学園を作った立役者でもあった。

恵子は不正や公私混同を嫌い、学園の入学が決まった甥に対して、理事長と親戚だということをお外しないようきつく言いつけていた。もちろん彼女も、優紀が甥であ

ることを徹底して秘密にしている。

その辣腕理事長の伯母が、わざわざ自分を指名して呼びだすとはいったいなにがあったのだろうか？

優紀は二、三度深呼吸をしてからドアをノックした。

「成島です。失礼します」

と声をかけて、若干の緊張を覚えながら理事長室に入る。とにかく、なかに誰がいるかもわからないので、実家などで伯母に接するような態度は見せられない。

だが、少年は室内にいた顔ぶれを見て、思わず立ちつくしてしまった。

窓際の理事長席に座っている恵子は、もちろん予想通りだ。しかし、理事長室には他に三人の少女がいたのである。

一人は長袖のテニスウェア姿で、手にジャージの上着を持ったロングヘアの美少女だった。顔立ちも非常に整っており、スレンダーな身体つきや全身からにじみでる上品さもあって、一見するとグラビアアイドルのようにも思える。

もう一人は白い剣道着に袴姿で、髪をポニーテールにまとめた小柄な少女だった。

こちらは美少女ながらも目つきが鋭く、まるで抜き身の日本刀のようなピリピリした雰囲気を漂わせている。

最後の一人は、バレーボール部のユニフォームを着た、抜きんで身長が高い少女

だ。おそらく、百八十センチくらいはあるだろう。ただ、おさげの髪を三つ編みにしていて眼鏡をかけているため、顔だけ見れば本好きの文学少女のようにも見える。

「麗菜、由依、加奈美……なんで、ここに？」

優紀は、少女たちのことを幼い頃から知っていた。

テニスウェアを着ているのは御堂麗菜、剣道着なのは鈴原由依、バレエ部のユニフォーム姿は栗林加奈美である。

少女たちのうち、由依と加奈美は今でも家が近所で、親同士の親交もある。麗菜も、今は郊外の豪邸に住んでいるものの、数年前まで優紀の家の近くにいた幼なじみだ。

また、幼い頃の優紀は体が弱く、学校を休みがちだった。そのせいで、一時期だったがイジメの対象にされたことがある。そんなときに彼を守ってくれたのが、三人の少女たちだった。

昔は四人でよく遊んだりしていたが、麗菜が引越して、また少年が性を意識しはじめた頃から、なんとなく由依と加奈美とも疎遠になってしまった。おかげで、ほぼ二年間も同じ学校に通っているというのに、話をしたのは数えるほどしかない。

しかし、どうして幼なじみの三人がこの場にいるのだろうか？

「伯母さん、これはどういうこと？」

少女たちは、優紀と理事長が親戚なことは知っている。その安堵もあって、少年が

思わず碎けた言葉で疑問をぶつけると、伯母が手招きをして甥を机の前に立たせた。

「優紀くん、運動部の特別強化予算の制度は知っているわね？」

「特別強化……ああ、あれね」

聞き覚えのある言葉に、少年はボンと手を叩く。

さまざまな独自の制度を持つ日ノ宮学園にあつて、なかでも特徴的と言われているのが、運動部に与えられる「特別強化予算」というものだった。

運動部の来年度の予算は、原則として前年までの活動実績を考慮しながら、生徒会によって配分が決められている。しかし、全国大会を狙えるなど一定の条件を満たしていれば、一つの部に限って理事長権限による特別な強化予算を出してもらえるのだ。「今回、女子テニス部と女子剣道部と女子バレーボール部が、特別強化予算の申請をしたのよ。優紀くんも知っていると思うけど、彼女たちはそれぞれの部のキャプテンなの」

もちろん、三人が各々の部のキャプテンになっていることくらいは、帰宅部の少年でも知っていた。もっとも、それが自分に関係のあることとは思えない。

「そこで、優紀くんを特別強化予算の検討委員に任命します」

と、恵子が穏やかな笑みを浮かべながら宣言した。

「はあ？ ちょっと待ってよ。どうして、僕がそんなことを？」

少年の声は、驚きのあまりひっくりかえってしまった。

特別強化予算という制度はもちろんだが、さらにユニークなのは、どの部に予算を与えるかを決めるシステムである。

強化予算を申請した部が複数だった場合、理事長によって検討委員に指名された生徒が一カ月間にわたって各部の視察を行なう。そして、どこに予算を与えるべきかを生徒自身が決定するのだ。

ただ、通常は無作為に選ばれているはずの委員に、優紀がピンポイントで指名されたことに伯母の意図が働いているのは、疑う余地がない。不公平なことを嫌う恵子としては、あまりにあからさまなやり方だ。

「それに、僕は三人と顔見知りだから、不公平になるんじゃないの？」

優紀が言葉をつづけると、伯母は首を横に振った。

「いえ、むしろ三人のことを公平に知っているからこそよ。三人の誰か一人でも幼なじみじゃなかったら、あるいは優紀くんが特定の誰かと親しかったら、わたしも指名しなかったわ」

なるほど、確かに今の優紀と三人の幼なじみの少女との関係を考えれば、逆にフェアな状態とも言えるのかもしれない。

「でも、僕なんかが……」

少年は役を引き受けることを、なお渋った。

なにしろ、優紀は普段から優柔不断で他人に流されやすい。その自覚はあるだけに、特別強化予算をどの部に与えるかの決断などできるとは思えなかった。

「優紀さん、ぜひとも我が女子テニス部に特別強化予算の配分をお願いしますわ」

理事長と優紀の話を見守っていたテニスウエア姿の少女が、不意に後ろから声をかけた。

「抜け駆けは許さんぞ！ 優紀、女子剣道部に予算をくれれば、万事解決だ」

麗葉に對抗するように、由依が少年に迫ってくる。

「えっと……優紀くん、女子バレー部に予算をお願いします」

と、加奈美も大きな身体を曲げて、深々と頭をさげる。

「え、あ……その……」

いきなりはじまった少女たちのPR合戦に、優紀はタジタジとなるしかない。

「ちよつと、由依さんに加奈美さん。わたくしのテニス部は、次の夏の大会こそ個人と団体で全国を狙うのですから、邪魔をしないでくださいませんか？」

麗葉が、二人の幼なじみをにらみつけた。

「それは、こっちのセリフだ。あたしたちの剣道部だって、全国に出るにはもっと資金が必要なんだ」

と言つて、由依もテニスウェア姿の少女を負けじとにらみかえす。

「あの……ば、バレー部も全国大会へ行くのに、予算がもつというんですけど……」
加奈美は他の二人に気圧された様子で、まるで猛獣に話しかけるようにおずおずと口を開く。

すると、麗葉が自信ありげな笑みを浮かべた。

「お二人とも、わたくしと勝負するということですね？ いいですね、受けて立ってさしあげます」

「ふんっ。麗葉になど、負けてたまるか」

「そんな、勝負なんて……で、でも予算をもらわないと……」

三人の幼なじみたちは、少年と理事長をそっちのけでにらみ合いをはじめた。少女たちからは、意地でも譲れないという強い意志が感じられる。

その様子に、優紀はすっかり圧倒されてしまった。

「伯母さん。やっぱり、僕には無理だつて。誰か他の人にしてよ」

少年は恵子のほうを向くと、泣きつくように訴えた。

検討委員は、ただでさえ責任重大な仕事である。少女たちの様子を見ていたら、自分で考えて結論を出すことなど、とてもできっこないという気がする。

だが、恵子にはこやかに「ダメ」と言つて優紀の申し出を却下した。そして、困

惑する少年と、彼の背後で蛇と蛙とナメクジよろしく三すくみ状態をつづけている少女たちのことを、妙に楽しそうに見つめていた。

